

# 三十一の詩

## — 検数員 桃井忠一の作品から —

土方の詩というのは、少ないながら探せばある。前に本誌でも少し紹介したが、あれ以外にも古いの新しいのがある。

それに比べると「仲仕」の詩はほとんど見当たらない。こちらの探し方のせいもあるだろうとは思いますが少ない。

しかし、せっかく「仲仕」の特集をするのだから、一つぐらい、その関係の詩を紹介したいと考えて思いついたのが、仲仕ではなくて検数員をやっている詩人の詩だ。

桃井忠一という。昭和ヒトケタ生まれ。

大阪の港区に住み、日本貨物検数協会大阪支部に就いている。それが職業だが、桃井には別に詩人という面もあり、多分、職業の年数よりは詩を書いている年数の方が長いだろう。

検数の仕事をしていて大怪我をしたのは数年前、入院療養をつづけていまは職場に戻っているが、怪我をした足は元に戻っていない。

そんな詩人だから、この「仲仕特集」に作品を紹介してもおかしくないだろう。

とても長い作品の一部分だけになるが、そこは作者にも読者にも許してもらえらると思う。

大阪港・一九七五年五月

その一

空が青かった

淡路島の山並がかすんでみえた

二、三年前ごろ

わが頭上を覆った黒煤雲が殆ど消えて

爽かな午前の太陽が建ち並ぶビルや倉庫群の上に光るこの青さは何からの投影だろうか

どこかであった何かの吉兆だろうか  
沖の浮標にも  
まあたらしいガントリークレーン並ぶ岸壁にも  
船影寥々(りょうりょう)  
その間隙を縫い走る舳・ボートの類も  
めっきり減った  
//ハマはもうあかんか//  
まっくろに陽灼けした顔が吐息混りにく

(三〇行省略)

俺たちは攻めるぞ 今日迄搾りとった奴め  
責めて ゆすって ぼいたくるのだ  
ほんとか それは  
年供(ねんぐ)の奪いあいだけで埒があくのか  
もっともっと根底から  
いのち賭って世の仕組もろともどんでん返す  
俺たちの根性もろともどんでん返す

X

傷ついではや一年数月

やっと歩ける足を杖を頼りに  
俺はなつかしの埠頭に出てみた  
そして声なく変りはてたこの光景を呑む

その二

ひとりの男が路傍に転っていた  
埠頭ちかい小さなマーケット街のはずれ  
傍に電柱と廃棄物を詰めた箱がならぶ  
過ぎゆく人足も停らない  
近寄らずとも酒臭がったわる  
汚れ放題の荷役装束 地下足袋 ねじり鉢巻  
屍同然のむくれ蒼ざめた横顔

ひたすら眠りこける昼まえの路傍  
醒めればまたあふるだろう  
ふところがきれたら  
重い空腹がきたら  
何かやっつてのけるか  
仕事さえあればゆく  
なければまたこうするだけだ

ケイサツだって飯ぐらいくれるぞ  
その他の思案は無縁  
眠りながらうそぶく  
も一歩困ればどうすることか  
真冬がくればこうはゆくまい  
まあなんとかなるだろう  
そのうち稼げるようにもなるさ

少しむこうのバブ(立呑酒屋)は朝からぎっしり  
沸る煮鍋の湯気がむれ固まった汗垢にしみる  
「どや 今日勝負は」  
「淀は荒れるで 昨日の雨で馬場泥んこや」  
「いや ごっついのは競輪に限る」  
「それにしてもよう負けたわ 此処んところ」  
財布の残り銭をほじくる哀しく尖った顔

(以下二七行省略)

桃井忠一の詩は大てい長いので、全部を紹介できない  
のが残念だ。しかし、直接に荷を掲げたり積んだりする  
仲仕でない桃井の詩にも、紹介したように、ミナトの現

実はずっしりと反映している。  
不十分ではあるが、一つの代表としてここに登場して  
もらったわけである。

なお、桃井忠一の詩集「整形外科病院にて」というの  
が去年発行されている。ネダンは少し高くて千三百円。  
編集委員会に希望者は連絡して下さい。少しだけ取り次  
ぎます。